

NEWS

「稲むらの火講座」がはじまります

「稲むらの火」は、今や津波防災のシンボルのように言われています。同時に、その主人公『濱口梧陵』の行動が教訓として継承されなければなりません。「稲むらの火の館」には、大きな使命が与えられています。大規模津波災害には避難行動の重要性を軸に、防災思想の普及をはかる必要があります。

平成27年度から「稲むらの火講座」を開設いたします。「稲むらの火」「濱口梧陵」「津波防災」をキーワードとして実施いたします。

第1回「稲むらの火講座」のご案内

1、演題『オープン・マインドで生きる

ー濱口梧陵と小泉八雲をめぐってー』

講師 小泉 凡先生(島根県立短期大学教授・A LIVING GODの著者小泉八雲のひ孫)

日時 平成27年5月4日(月・祝日)
午後1時～3時

2回目以降は、下記の予定です。

2、演題『濱口梧陵と福沢諭吉』(仮)

講師 曾野 洋先生(四天王寺大学教授・教育学部長、毎日新聞連載中)
(平成27年8月開催予定)

3、演題『広川町の津波防災・避難』(仮)

講師 近藤 誠司先生(関西大学社会安全学部准教・元NHKディレクター)
(平成28年1月開催予定)

以上の予定で実施いたします。参加希望者はその都度お申し込みください。定員は100名ですので、先着順とします。講演は無料ですが、その後館内見学をされる場合は、有料となりますので、ご承知おきください。

申し込みは、 ☎64-1760 まで



まんが「レキタン」、「繁栄の絶対法則」を頂きました

昨年4月から6月まで、「読売KODOMO新聞」に連載されているまんが「レキタン」に「濱口梧陵さん」と「広村堤防」が取り上げられましたが、この程単行本になり、出版の小学館から送付されました。また、PHP研究所からは「繁栄の絶対法則」をいただきました。「稲むらの火」「濱口梧陵」さんのことが、詳しく載っています。



〈お客様の声〉

1、(梧陵さんの年表を見ながら)

交流のある人が、^{そうそう}錚々たる人物ばかりですね。幕末から明治維新にかけて活躍した、教科書に載っている人の名前がたくさん……。この年表一枚で、ドラマか映画になりそうですね。(個人客の男性)

2、先日は、たいへん参考になるお話でした。昨日は、紀伊半島の先端、串本町に参りました。串本町は三連動の地震や南海トラフの地震の津波からの避難困難地域でございます。住民のみなさまは、想定のあまりの大きさにあきらめが漂っています。広川町は、館長のお話のように、偉人「濱口梧陵」さんが居るといことが、現在にも良い影響を与え続けているなど感じた次第でございます。

(大学生の卒業論文調査に同行の先生)

耐久社記念館に就いて

濱口 恵璋

10

この記念館の移転に世話をして居る或一人の人に聞くとこの事業に対し、同じ同窓生の中でも喜んで寄附をして呉れる人もあれば、またこれに反対して寄附を拒むのみならず、その云う言葉に新しい世界には新しい事業を計画すればよいので、何も故人がした事を記念するようなことをするのは必用はない。また漢文学などは全く必要のないものである云々と云うものがあるとのことであつた。

なるほど、それも無理からぬ云ひ分のやうであるが、よく考ふると決してそうではない。人間世界は過去の記録である歴史によって、これ迄に知り得たることより、より以上の所に進むのが所謂進歩と云ふものである。過去の歴史を抜きにして進歩したなどと思つて居ても、既に故人が経験済みであつたと云うことがしばしばある。それで新しいことをするには故い歴史を知る必要がある。偉人の思想、習慣、風俗等に就いて予め知り置くのは決して無用なことでない。これによりて我々の新しい知識にも或る教が附加されるものであると云うことを知らねばならぬ。次にまた漢文学など学ぶ必要は全くないと云うのも、また浅膚^{せんぷ}の見であると云はねばならぬ。

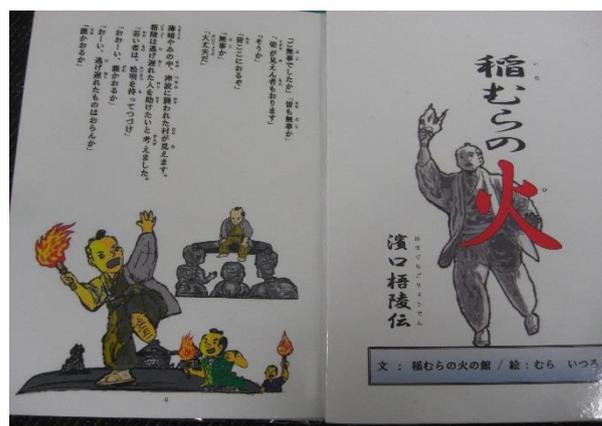
中国は我が国の一衣帯水^{いちいたいすい}を隔てるのみの隣国で同文の国であり過去に於ける我が国の文化が中国に影響されたのも随分多いのである。そして今日では彼れには共産主義^{しんじゆん}的思想が浸潤して日本を赤化^{せつか}せんとするような考へを持って居るものもあり、左なくとも日本と親善せんが為めにとて現に北京で日本文を以て記載して居る雑誌に「人民中国」と云うのがある。これは中国で発行する日本文で記載して居る雑誌で、これは日本文のみならず、英仏独伊から更に印度語にまで翻訳してそれぞれの国に贈り、中国との交歓をはかつて居る雑誌で、その態度は実に雄大なものである。

日本人もこれ位の度量を以て中国語の雑誌を出し、彼等感化する位の思想を持たねば駄目である。こんなことをするとせば、現代語の漢文を読み得ずしてはそんなことは出来ないではないか。戦時「大阪毎日」が中国語の雑誌を出して居ることがあつたがそれも今日では止まって居る。中国を指導する位の考へを持たねば駄目である。それはそれとして、漢文学を読み得ぬようなことでは我が国で発達した日本に於ける中古以来の図書も祿に読めぬことになり、日本文化は退歩を辿ることとなる。こんなくだらぬことを書くなどは汗顔の至りではあるが、そんな間違つた思想を懐いて居るものがあると云うことを聞き老婆親切の為に一言を書き添えた次第で、貴重な紙面を浪費したことは申訳ないことである。

完

#####

大阪守口市の『むら いつろう』さんが、稲むらの火の絵本を自主制作され、寄贈してくださいました。



<稲むらの火の館の紹介>

濱口梧陵記念館／津波防災教育センター
〒643-0071 住所 広川町広671

TEL：0737-64-1760／FAX：0737-64-1761

<http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamurano/hi/>

*開館時間：午前10時～午後5時（受付終了4時）

*休館日：月曜日・火曜日（祝日開館）

年末年始（12/29-1/4）

*記念館だけの入場は無料です。